

教務だより

2010年7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

THIS IS IT! ワールドカップとマイケルジャクソン

茗溪塾塾長 宇野雅春

ワールドカップで、寝不足の日々を送った生徒も多かったと思います。デンマーク戦の朝3時はさすがに起きられないと思っていたけれど、不思議なもので4時には目が覚めその後の続きをしっかりと見てしまいました。決勝トーナメント進出そして最後のPK戦まで、忙しい中でも目が離せませんでした。練習試合で負け続け、前評判も惨憺たる状況で、しかも世界ランク40位前後という状況下で、マスコミの期待感もいまいちだったのに、開幕と同時に「強い!」という印象に変化していきました。すべての試合が終わったとき、多分私だけでなく日本中の人たちが、残念!という気持ちより、もっと大きな感動の渦の中にいたように思います。そこにはやるだけのことをやった!という充実感さえありました。勝つよりも大切なものを感じてしまったというのが本当のところです。PK戦での失敗よりそれへの対応が「チームワーク」の素晴らしさを感じさせてくれました。

感動が私たちを包んでくれたばかりでなく、いつかは勝てるという「日本サッカー」の可能性を大きく示してくれたように思います。世界の強豪と比較しても実力が互角というイメージをこんなに強く感じたことは今までなかったように思います。日本もここまで来たかという感慨と、たくさんのサッカー少年たちの夢を思いました。受験のためにサッカーを中断する生徒たちもいます。世界に通用するサッカーのレベルというものは才能はもちろん、すごい努力を必要とするのだろうなとつくづく思いました。

時を同じくして昨年亡くなったマイケルジャクソンの一周忌がありました。キングオブポップスといわれるように、少年の頃から大スターであったマイケルジャクソンは、ビートルズと並んで私たちの時代に常に存在していた時代の顔ともいえる存在であったことを、それほどファンでもなかった私でさえ今更のように思ってしまいます。ディズニーランドの「キャプテンEO」が再開すると聞いてちょっと気持ちが弾みます。同時にずいぶん昔に見たはずのその映像がつい昨日見たかのようにありありと思い出されるのです。彼が最後に残した映画「This is it」を見て思ったことは、先駆的なアーティストの厳しい自己鍛錬と孤独です。映画をみて、彼の才能と努力が素晴らしかったことに改めて思い当ります。そしてそこにもチームは存在しています。彼の才能に敬服する、さらに優秀なスタッフが周りを固め意見を交換し、それぞれが工夫を重ねます。そして「マイケルジャクソン」をさらに偉大なものに作り上げていく様(さま)が映画には描かれていました。もし、マイケルジャクソンが生きてこの「This is it」の50公演を実現していたら、新しいマイケル旋風が巻き起こっていたに違いありません。古いタイプの私のような年代からみれば、独創的で奇抜にも思える「踊り」も「スタイル」も、多分次の世代ではスタンダードになると思われる「かっこ良さ」を持っています。50歳にしていまだトップスターであり続けた事の凄さを思い、大きな富に恵まれても、理想を信じ夢を追い求め続けた大スターの「厳しさ」にジーンと来てしまいました。

ワールドカップとマイケルジャクソン、この夏、最高の贈り物!を受け取った私たちの本当の夏が始まろうとしています。オーディションさながらに、夏のための研修が塾では行われています。

自分たちが求めているもの、自分たちが目指していること、楽しいこと、苦しいこと、嬉しいこと、辛いこと、すべてが、次へのステップです。一人ひとりがお互いを理解し、意見を出し合い、違いを認め合い新しいことを生み出していくこと。全員の努力が大きな力を生むということ。そこに生まれる「相乗効果」が新しい何かを生み出します。ささやかかもしれないけれど、自分たちの精いっぱい「This is it」を示していきたい今年の夏です。